

## 貨幣の範疇規定について(三)

——過渡期の經濟法則の考察——

山 本 二 三 丸

### 十

レーニンのすぐれた労作、『偉大な創意』が書かれたのは、一九一九年六月、帝國主義列強に支援されたコルチャック、デニキンらの強力な反革命白衛軍の侵攻がソヴェト政權の存立を脅かしつつあった、その苛烈な国内戦のさなかである。この労作は、『銃後の労働者の英雄主義について。「共產主義土曜労働」について』という副題をつけられているが、それは、『アラウダ』（五月十七日付）に載った同志ア・ジェの論文、『革命的なやり方の活動（共產主義土曜日）』に直接関連して書かれたものである。右のア・ジェの論文がレーニンによっていかに重要視されたかということは、レーニンがその論文の内容を、一語あまさず全部、自身のこの労作のなかに引用してかかげているという事実によっても明らかであるが、その引用にあたって、レーニンはまず、どこに重要な問題があるかということ、つぎのように説明している。

貨幣の範疇規定について(三)

「新聞は赤軍兵士の英雄主義の多くの例を報じている。コルチャック軍、デニキン軍、その他の地主と資本家の軍隊とたたかっている労働者と農民は、社会主義革命の獲得物をまもって、しばしば奇跡的な勇敢さと忍耐力を示している。バルチザン主義の根絶、疲労と放恣の克服は、徐々に、かろうじてではあるが、なにもにもかかわらず前進している。社会主義の勝利の大業に、自覚して犠牲をささげている勤労大衆の英雄主義、これこそ赤軍の新しい、同志的規律の基礎であり、その復活、強化、成長の基礎である。

統後の労働者の英雄主義も、それにおとらず注意に値する。この点で、労働者みずからの創意による共産主義労働の組織は、ほんとうに巨大な意義をもっている。あきらかに、これはまだ発端にすぎないが、これはなみなみならぬ大きな重要性のある発端である。これは、ブルジョアジーの打倒よりも、いっそう困難で、本質的で、根本的で、決定的な、変革の発端である。なぜならば、これは自身の沈滞、放恣、小ブルジョアの利己心にたいする勝利であり、のろうべき資本主義が、労働者と農民に遺産として残した、これらの習慣にたいする勝利だからである。この勝利がためられるとき、そのとき、そしてそのときだけに、新しい社会的規律、社会主義的な規律がつくりだされるであろうし、そのとき、そしてそのときだけに、資本主義への復帰は不可能となり、共産主義は真に不敗のものとなるであろう」(全集第四版、第二十九卷、三七九―三八〇ページ、傍点―レーニン、ゴシック体―山本)。

レーニンは、つづいて、ア・ジェの論文および同志エス・エルの論文(五月二十日付『プラウダ』所載)、同志ア・チャチェンコの論文(六月七日付同紙所載)、その他の『プラウダ』に掲載された「共産主義土曜労働」にかんする報道記事の要点をできるだけくわしく「完全に」引用してかかげたのち、なぜそのような「詳細かつ完全な」引用をしたかということについて、

「ここには、疑いもなく、われわれの新聞が十分な注意をはらっておらず、またわれわれがみな、まだ十分に評価しなかつた共産主義建設のもつとも重要な面のひとつが見られるからである。」(前出、三八六ページ、傍点—山本)

とその理由を述べて、「共産主義建設の事実になるべく多くの注意をむける」必要のあることを強調し、「ブルジョアジーの反抗の打倒、彼らの陰謀の鎮圧という、主要な、また基本的な任務」とならんで、いまや「積極的に共産主義を建設すること、新しい経済関係、新しい社会を創造するという、より本質的な任務」が重大な意義を有するものとして提起されていることを指摘し、この新たな、より本質的な任務にとって、プロレタリアートの独裁がいかに決定的な意義と役割とをもつものであるかということ、つぎのように明確に述べている。

「プロレタリアートの独裁は——わたくしがすでに一度ならず指摘するおりがあつたように、とりわけ三月十二日のベトログラード・ソヴェトの会議での演説でも指摘したように——搾取者にたいする、たんに強力 (HEGHEIM) ではないばかりか、強力を主としているものですらないのである。この革命的強力の経済的基礎、その生命力と成功の保障であるのは、プロレタリアートが、資本主義にくらべていっそう高度の型の、社会的労働組織を代表し、実現しているということである。ここにこそ核心がある。ここにこそ力の源泉があり、共産主義の不可避的な、完全な勝利の保障があるのである。」

農奴制的な社会的労働組織は、鞭の規律に支えられていたが、そのもとでは労働者はひとにぎりの地主に略奪され、愚弄されて、極度の蒙昧とうちひしがれた状態にあった。資本主義的な社会的労働組織は、飢えの規律に支えられていた。そして膨大な勤労大衆は、ブルジョア文化とブルジョア民主主義の、いっさいの進歩にもかかわらず、もつとも先進的な、文明化された民主主義的共和国においてさえ、賃銀、奴隷または抑圧された農民の蒙昧でうちひしが

れた大衆のままであり、それをひとにぎりの資本家が搾取し、愚弄していたのである。共産主義的な社会的労働組織——社会主義はその第一歩である——は、地主のくびきをも資本家のくびきをも投げすてた勤労者自身の、自由で自覚した規律に支えられており、さきにすすめばすすむほど、ますますそうなるであろう。

この新しい規律(дисциплина)は、天から降ってくるものでなく、善意の願望から生まれるものでもない。それは、大規模な、資本主義的生産の物質的な諸条件のなから、またそのなかからだけ成長してくるのである。この物質的な諸条件なしには、新しい規律は不可能である。だが、これらの物質的諸条件を担うもの、あるいはそれを先導するものは、大規模な資本主義によってつくりだされ、組織され、結集され、教育され、啓蒙され、きたえられた、特定の歴史的階級である。この階級とは、プロレタリアートである。

プロレタリアートの独裁とは、このラテン語の科学的・歴史的・哲学的な表現を、もっと簡単な言葉に翻訳すれば、まさしくつぎのことを意味する。

ただ特定の階級、すなわち都市の労働者、一般に工場労働者、工業労働者だけが、資本のくびきを打倒する闘争で、この打倒そのものの過程で、勝利を維持・強化するための闘争で、新しい、社会主義的社会機構を創設する事業で、階級の完全な廃絶のための闘争全体の中で、勤労被搾取者の全大衆を指導することができる。(ついでに述べておくが、社会主義と共産主義の科学的な差異は、まえの言葉が、資本主義のなから成長しつつある新しい社会の最初の段階を意味し、つぎの言葉が、そのより高度な、もっと進んだ段階を意味している、というだけのことである)〔前出、三八六―三八七ページ、傍点およびゴシック体―山本〕。

ついで、レーニンには、現代の修正主義的指導者たち、背教者―えせ共産主義者たちの元祖であるむかしの自称社会

主義者、裏切りの指導者たちのこの点に坎する致命的欠陥を暴露して、つぎのように教示している。

「『ベルン』黄色インタナショナルの誤りは、その指導者たちが、口先きで階級闘争とプロレタリアートの指導的役割をみとめるだけで、最後まで考えぬくことを恐れ、ブルジョアジーにとってはとくにおそろしい、絶対に受けいれることのできない、不可避的な結論をおそれていることにある。彼らは、プロレタリアートの独裁もまた階級闘争の一時期であること、階級闘争は、階級が廃絶されないうり避けられないものであり、その形態をかえ、資本が打倒されたのちの初めの時期には、とくにはげしく、とくに特異なものになる、ということをお認めるのをおそれている。政治権力をたたかいたのちにも、プロレタリアートは階級闘争をやめないもので、階級の廃絶にいたるまでそれをつづける。だが、いうまでもなく、この階級闘争はちがった環境のなかで、ちがった形態で、ちがった手段でつづけられるのである。

だが、「階級の廃絶」とは、なにを意味するのか？ 社会主義者と自称する人々はみな、この社会主義の究極の目的をみとめているが、かならずしもすべてのものがこの意味をよく考えているわけではけっしてない。階級と呼ばれるのは、歴史的に規定された社会的生産の体制のなかで占めるその地位が、生産手段にたいするその関係（その大部分は法律によって確認され、成文化されている）が、社会的労働組織のなかでの役割が、したがって、彼らが自由にしうる社会的富の分け前をうけとる方法と分け前の大きさが、他とちがう人々の大きな集団である。階級とは、一定の社会経済機構のなかで占めるその地位がちがうことによって、そのうちの一方が他方の労働をわがものとするこゝろができるような、人間の集団を言うのである。

階級を廃絶するには、搾取者、すなわち地主と資本家を打倒する必要があるばかりでなく、彼らの所有を廃止する

必要があるばかりでなく、さらに、生産手段のあらゆる私的所有を廃止する必要があり、都市と農村の区別をも、肉体労働者と精神労働者の区別をも廃止する必要がある。これは、長い年月を要する事業である。これをなすとげるとは、生産力の発展における巨大な進歩が必要であり、小規模生産の数多くの残存物の抵抗（しばしば受動的な抵抗）—それはとくに頑強であり、克服するのはとくに困難である）を克服する必要があり、またこれらの残存物と結びついた習慣と因習との巨大な力を克服する必要がある。

すべての「勤労者」に一樣にこの仕事をはたす能力があると考えるのは、時代おくれの、マルクス以前の社会主義者のこのうえもない空文句か幻想であろう。なぜならば、この能力はひとりであたえられるものではなく、歴史的に成長し、しかも大規模な資本主義的生産の物質的諸条件からだけ成長するものだからである。資本主義から社会主義にうつる道の初めには、この能力をもっているのはプロレタリアートだけである。プロレタリアートは、その双肩にかかっている巨大な任務をなすとげることができる。それができるのは、第一に、プロレタリアートが文明社会のもっとも力のある、またもっとも先進的な階級であるからであり、第二に、それがもっとも発展した諸国では、住民の大多数を占めているからであり、第三に、ロシアのようにおくれた資本主義諸国では、人口の大多数が半プロレタリアに、すなわち、一年の一部はつねにプロレタリア的な暮しをし、資本主義的企業にやとわれて働くことによつて、つねに生計の一部分をえている人々に属しているからである。

自由、平等、民主主義一般、勤労民主主義派の平等などというようなきまり文句から出発して社会主義への移行の任務を解決しようとする（カウツキー、マルトフ、その他のベルン黄色インタナショナルの英雄がしているように）<sup>(23)</sup>ものは、そのことによつて、思想上ブルジョアジーの尻に奴隷のようについていく小ブルジョア、俗物、素町人であ

るといふ本性をさらけだしているにすぎない。この任務の正しい解決をあたえることができるのは、政治権力を奪取した特別な階級、すなわちプロレタリアートと、非プロレタリア的および半プロレタリア的な勤労住民大衆全体とのあいだの特殊な関係を、具体的に研究することだけである。しかもこの関係は、空想のうえで調和のある「理想的」な環境のなかで形成されるのではなく、ブルジョアジーによる狂暴な、多種多様な反抗という現実の環境のなかで形成されるのである」(前出、三八七—三八九ページ、傍点—レーニン、ゴシツク体—山本)。

(23) これらの「英雄」たちは、さすがに自分たち自身を真正正銘の「マルクス・レーニン主義者」だと言いふらすことはなしえなかつた。だが、現代の修正主義的指導者、えせ共産主義者たちは、レーニンによって完膚なきまでに論破され粉砕された、これら「英雄」どものたわごとをくりかえし並べたて、「ブルジョア議会制度による平和的移行」やら、「全人民的国家」などといった反レーニンの空文句をくりかえしながら、しかも、それが真正正銘のマルクス・レーニン主義を守るものだと強弁する厚顔無恥をそなえている。だから、かれらには、さきの「英雄」たちが頂戴した「小ブルジョア、俗物、素町人」という敬称はもはや当ってはいない。むしろ、「ブルジョア的政治屋、堂にいった反革命的山師」といった名称のほうがその本性にはるかにびつたりだといわなければなるまい。

レーニンは、つづいて、非プロレタリア的および半プロレタリア的勤労住民大衆にとつてはブルジョアの「秩序」に、ブルジョアの「翼」のもとにあともどりしようとする小ブルジョアの動的な動揺と気迷いがきわめて大きく、不可避であるが、これにたいして、プロレタリアートは、英雄的な大胆さで、革命的な無慈悲さで、資本のくびきを打倒し、搾取者を打倒し、その反抗を鎮圧し、搾取者が存在する余地のない、新しい社会を創造する道を、みずからの血できりひらいているのであって、このために、非プロレタリア的および半プロレタリア的勤労住民大衆は「精神的・政治的権威」がプロレタリアートにあることをみとめざるをえないのだ、ということを明らかにして、そのプロレタ

リアートこそが社会主義を建設する主体であり指導者でなければならぬということ、つぎのように説明する。「そのプロレタリアートは、搾取者を打倒し、その反抗を鎮圧しているばかりでなく、新しい、より高度な、社会的連係 (связь) をつくりだし、社会的規律——彼ら自身の団結の力と、彼ら自身のより自覚した、大胆な、結集した、革命的な、試練を経た前衛の力のほかには、自分の上に立つどのようなくびきも、どのような権力も知らない、自覚し、団結した労働者の規律——をつくりだしているのである。

勝利するためには、社会主義を創設し確立するためには、プロレタリアートは二重の、あるいは一体となった二つの任務を解決しなければならない。それは、第一に、プロレタリアートは資本にたいする革命的闘争で、その献身的な英雄主義によって、勤労被搾取者の全大衆をひきつけ、ブルジョアジーを打倒し、ブルジョアジーのあらゆる反抗を完全に鎮圧するために、これをひきつけ、組織し、指導すること、第二に、プロレタリアートは、新しい経済建設の道に、新しい連係、新しい労働規律、新しい労働組織——科学と資本主義的技術の最新の成果を、大規模な社会主義的生産をつくりだしつつある、自覚した労働者の大衆的団結に、結びつけているところの——をつくりだす道に、勤労被搾取者の全大衆をも、小ブルジョア層全体をも導いていくことである。

この第二の任務は、第一の任務より困難である。というのは、それは、個々に激発する英雄主義によってはけつて解決されず、大衆的な日常活動におけるもつとも持続的な、もつとも粘りづよい、もつとも困難な英雄主義を必要とするからである。だが、この任務は第一の任務よりもいっそう本質的なものである。というのは、結局のところ、ブルジョアジーに勝利するための力の、もつとも深い源泉となり、また、これらの勝利を強固にし、くつがえることのないものとする、ただ一つの保障となりうるのは、新しい、より高度な社会的生産様式 (способ общественного



Производства) だけであり、資本主義的生産と小ブルジョア的生産とを大規模な社会主義的生産によっておきかえることだけだからである」(前出、三九〇ページ、傍点—レーニン、ゴシツク体—山本)。

以上のように、共產主義建設のもっとも重要な側面を明らかにしておいて、レーニンは、主題の「共產主義土曜労働」について、

「それが、労働の生産性を発展させ、新しい労働規律へうつり、社会主義的な経済的条件と生活条件とをつくりだすうえで労働者の自覚した、自発的な創意をわれわれに示しているからこそ、巨大な歴史的意義をもっているのである。」(前出、三九二ページ)

と述べ、なお「共產主義土曜労働」がいかに決定的な意義をもつ重大なものであるかということ、つぎにみられるように明確に説明する。

「共產主義土曜労働」は、それをはじめたのが、けっして例外的によい条件のもとにおかれている労働者ではなく、種々の専門をもった労働者——そのなかには専門のない労働者、つまり普通の、すなわちもつとも困難な条件のもとにおかれている雑役工もふくまれる——であるからこそ、きわめて重要なのである。われわれはみな、ロシアだけでなく全世界に見られる労働生産性の低下の根本条件をよく知っている。それは帝国主義戦争によってひきおこされた零落と窮乏化、憤激と疲労、疾病と栄養不良である。この最後のものが、重要性からいえば第一位を占めている。飢餓——これが原因である。だが飢餓をなくすためには、農業でも、運輸でも、工業でも、労働生産性の向上が必要である。したがって、労働生産性をたかめるためには、飢餓をまぬがなければならない。飢餓をまぬがれるためには、労働生産性をたかめなければならないという、悪循環のようなものが生まれる。

だれでも知っているように、このような矛盾は、この悪循環をたちきることによって、大衆の気分の転換によって、個々のグループの英雄的なイニシアティブによって、実践のうえで解決されている。そして、このようなイニシアティブは、こうした大衆の気分の転換を背景として、しばしば、決定的な役割を演じているのである。モスクワの雑役工やモスクワの鉄道従業員(もちろん、その大多数のことをいっているのであって、ひとにぎりの投機者、管理員等々の白衛派のことではない)——これは絶望的に困難な条件のもとで生活している勤労者である。たえない栄養不良は、新しい収獲をひかえて、食糧事情が一般的に悪化している今日では、そのまま飢餓である。そして、実にこの飢えた労働者が、ブルジョアジー、メンシェヴィキ、エス・エルの悪意のある反革命的煽動にとりかこまれているこの労働者が、「共産主義土曜労働」を組織し、なんの報酬もないに、時間外労働をし、疲れはて、栄養不良のためにへとへとになり、精根がつきていたにもかかわらず、労働生産性の巨大な向上を達成しているのである。これこそもつとも偉大な英雄主義ではなからうか? これこそ、世界史的な転換の発端ではなからうか?

労働生産性は、結局のところ新しい社会機構が勝利するために、もつとも重要な、もつとも主要なものである。資本主義は、農奴制のもとでは見られなかったような労働生産性をつくりだした。資本主義は、社会主義が、新しい、はるかに高度な労働生産性をつくりだすことによって、最終的に克服されることができるとし、また最終的に克服されるであろう。これは非常に困難な、非常にながくかかる事業である。だが、それはすでに、はじまっている。これこそもつとも主要なことである。もし一九一九年夏の、飢えたモスクワで、帝国主義戦争の困難な四年間と、そのつぎに、さらにいっそう困難な内戦の一年半を過ぎてきた飢えた労働者が、この偉大な事業をはじめることができたのであれば、われわれが内戦に勝利し、平和をかちとったあかつきには、それからさきの発展はどのようなものとなるであらうか?

ろうか？

共産主義は、自発的な、自覚した、団結した、そして先進的技術を利用する労働者の、資本主義的労働生産性にくらべてより高度の労働生産性である。共産主義土曜労働は、共産主義の事実上の発端として、異常に貴重なものであり、そしてこのうえなくまれな事柄である。なぜなら、われわれは「資本主義から共産主義への移行の、ようやく、最初の、数歩をふみだしているにすぎない」段階にある（わが党の綱領のなかでまったく正当に述べられているように）からである。

労働生産性を増大させるため、労働者自身や、その「身近な人々」のものにならないで、彼らにとって「遠い人々」、すなわち、全体としての全社会のものに、はじめは一つの社会主義国家に結合されているが、のちにはソヴェト共和国同盟に結合される幾千万幾億の人々ものものになる穀物、石炭、鉄、その他の生産物の一ブードといえども保存するため、困難な仕事のうちかとうとする献身的な平労働者の配慮が現われるところに、共産主義ははじまるのである」<sup>(24)</sup>（前出、三九三―三九四ページ、傍点―レーニン、ゴシック体―山本）。

(24) レーニンは、これにすぐつづいて、

「カール・マルクスは、『資本論』のなかで、自由と人権をうたうブルジョア民主主義の大憲章の華麗さと高言をあざわらい、卑劣なベルン・インタナショナルの現在の卑劣な英雄たちにいるまで、すべての国の素町人や俗物どもの目をくらまして、いるところの自由、平等、友愛一般についてのこうしたすべての美辞麗句をあざわらっている」（前出、三九四ページ、傍点―レーニン）と述べている。この点については、行論でいずれふれる機会もあろう。

さて、以上、レーニンの労作、『偉大な創意』について、そのうちの当面重要な意義をもつと考えられる個所をいけば抜粋した形でみてきたが、それらを総括することによって、われわれは、過渡期における共産主義建設のための

不可欠の要件として、つぎのものがそこに明示されていると考えることができる。

1 まず、階級が廢絶されないかぎり、階級闘争が存続し、したがって、プロレタリアートの独裁は必ず存続しなければならぬ。ただし、そこでの階級闘争は、「ちがった環境のなかで、ちがった形態で、ちがった手段で」つつけられる。

2 二では、階級とはなにか？ 生産手段の所有関係をもって階級区別の唯一の基準とすることは、正しいといえようか？ それは、けつして正しいとはいえない。生産手段の私的所有が廢絶され社会的所有が実現したときにも、それだけでそこに階級区別がなくなつたということはできないし、そうした主張は誤りであり、きわめて危険なものである。階級区別の基準としては、われわれは、つぎの四つのものを的確にとらえなければならない。

イ 社会的生産の体制のなかで占めるその地位。

ロ 生産手段にたいする所有関係。

ハ 社会的労働組織のなかでの役割。

ニ 各人が自由にしうる社会的富の分け前を受けとる方法と分け前の大きさ。

これらの四つの基準を厳密にあてはめてみて、そこに階級区別があるかないかを的確に見きわめることが必要であり、それらの基準のうちのわずかひとつについてだけでも、そこに明白な区別が認められるかぎり、階級区別が存続しているといわなければならない。それらの基準のうちで、現在の「社会主義」諸国の基本的な生産関係のあり方とその生産関係がどの方向に、どのように發展しつつあるかということを的確にとらえるために欠くことのできない、重要で適切な基準としてぜひとも考慮されなければならないのは、ロよりもむしろ、そのほかの三つのもの、とりわ

け二に示されたものといわなければならない。<sup>(25)</sup>

(25) マルクスが、その晩年の不朽の労作、『フランスにおける内乱』のなかで、この地球上ではじめて労働者階級の権力をうちたてたパリ・コミューンの貴重な歴史的经验を総括して、コミューン（＝共產主義社会）ではどんなに重要な社会的機能を担っている者であってもその「賃銀」は平労働者なみでなければならぬ、という基本原則を明記していることは、きわめて教訓的なことといわなければならない。行論での参照にそなえて、この基本原則が述べられているくだりを、つきにかかげておこう。

「……そこで、コミューンの最初の政令は、常備軍を廃止し、それを武装した人民とおきかえることであった。

コミューンは、市の各区での普通選挙によって選出された市会議員によって構成されていた。彼らは、選挙人にたいして責任を負い、即座に（ドイツ版では、いつでも）解任することができた。コミューン議員の大多数は、当然に、労働者か、労働者階級の公認の代表者かであった。コミューンは、議会ふうの機関ではなく、同時に執行し立法する行動的機関でなければならなかった。警察は、これまでのように中央政府の道具ではなく、その政治的屬性をただちに剝ぎとられて、責任を負う、いつでも解任できるコミューンの道具に変えられた。行政府の他のあらゆる部門の吏員も同様であった。コミューンの議員をはじめとして、公務は労働者なみの賃銀で果されなければならなかった。国家の高官たちの既得権や交際費は、高官たちそのものといっしょに姿を消した。公職は、中央政治の手先きたちの私有財産ではなくなった。市政ばかりでなく、これまで国家が行使していた発議権のすべてが、コミューンの手中におかれた」（マルクス・エンゲルス全集、第十七巻、三三八―三三九ページ、邦訳大月版、三一五ページ、傍点―マルクス、ゴシック体―山本）。

3 つぎに、ではいかにして階級の廃絶を達成することができるかが、問題となる。そのためにまず必要なことは、資本主義がのこしておいたつぎのような「否定的」要因をすべて完全に一掃することである。（地主と資本家を打倒し、その反抗を鎮圧し、その生産手段を収奪して社会的所有にうつすことは、もちろん、第一の前提要件であるが、それは、ここでは一応問題の外におく。）

イ 生産手段のあらゆる私的所有の廃止。

ロ 都市と農村の区別の廃止。

ハ 肉体労働者と精神労働者の区別の廃止。

ニ 小規模生産の数多くの残存物の抵抗の克服。

ホ 右の残存物と結びついた習慣と因習の巨大な力の克服。

しかし、これらはすべて、共産主義建設にとつては、むしろ消極的な要件であつて、あらたに共産主義社会をつくりだすための積極的な要件ということとはできない。それらは、資本主義がのこしたあらゆる残存物を一掃し、とりわけ階級区別を廃止し、歴史の齒車が再び資本主義にむかつてあともどりするのを阻止するもの、後退を不可能にするためのものといつてよい。

4 では、共産主義建設を積極的におしすすめるもっとも重要な、不可欠の要因は、なんであるか？ それは、つぎのようなものである。

イ 新しい、より高度な社会的連係をつくりだすこと。

ロ 自覚し、団結した労働者の新しい労働規律をつくりだし、確立すること。

ハ 科学と資本主義的技術の最新の成果を、大規模な社会主義的生産をつくりだしつつある自覚した労働者の大衆的団結に結びつけているところの、新しい社会的労働組織をつくりだすこと。

これら三つの要因はたがいに密接に結びつきあい、むしろ一体を成しているものといわなければならない。もちろん、プロレタリアートは、彼ら以外の勤労被搾取者の全大衆をも、小ブルジョア層全体をも、右の三つの要因をもつ

て教育し、組織し、指導していかなければならない。

5 共産主義とは、自発的な、自覚した、団結した、そして先進的技術を利用する労働者が、資本主義の労働生産性にくらべてはるかに高度の労働生産性をもつことである。この高い労働生産性が資本主義的労働生産性をはるかに凌駕するものとなるのは、たんによりすぐれた機械またはより高度の技術の採用だけによるものではけっしてない。むしろ、それを決定的なものにするのは、生きた人間、労働者が真に自覚した、共産主義的意識の担い手として団結していること、ただそのことだけである。自覚なく共産主義的意識のひとかけらもなく、ただ物質的関心のみ旺盛で個人的利益を第一において労働生産性がある程度高めることができたとしても、それでは共産主義はおろか、社会主義に近づくことすらおぼつかない。レーニンが的確に教示しているように、平労働者が、彼個人や彼の「身近な人々」の利益を第一にしてそのために精を出して働くというのではなく、彼にとつて見知らぬ「遠い人々」のために、世界の隅々の搾取され、抑圧され、虐げられている勤労人民大衆の解放のために、そのためにまさに自身の「生命と健康を惜しまないで」、困難な仕事にうちかとうと刻苦奮闘するとき、こうした献身的な平労働者の大群の共産主義的自覚にあふれた配慮があらわれるとき、それがあらわれるところに、ただそこにおいてのみ、共産主義ははじまることができるし、またはじまらなければならないのである。

このようにして、究極において、共産主義建設のいっさいを決定するものは、まさしく高い精神的能力と肉体的能力の担い手である労働者であり、真に自覚した、新しい労働規律、新しい労働組織を身につけた人間、共産主義的人間でなければならぬ、ということが明らかとなる。真の自覚ある共産主義的労働者の新しい労働組織と高い労働生産性——ここにこそ、共産主義建設を決定する、もつとも重要な鍵がある、といわなければならない。

さて、以上、過渡期なるものについて、したがってまた、共産主義建設のあり方について、主としてレーニンの勞作に拠りながら、簡単な理論的考察をこころみてきた。この地球上ではじめてプロレタリア社会主義革命をなしとげ、過渡期を正しく分析して社会主義建設の路線を理論的・実践的に正しく的確にうちだし、これを推進していったレーニンのもろもろの教示が、このうえもなく貴重であり、また今日の「社会主義」諸国のあり方を見きわめるうえにおいても、もっとも重要な、決定的指針のひとつでなければならぬことは、まったく疑いない。今日、地球上で「マルクス・レーニン主義」を標榜する政党、組織および個人は数えきれないほど多いが、しかし、それらのかくれた本質を的確に識別し、そのどれが真の「マルクス・レーニン主義」の名に値するものかを見きわめる基準もまた、これまで考察してきたレーニンの主要な教示のうち完全に示されている。その点でとくに注意しなければならぬのは、頭の中でつくりあげた「第二次世界大戦後の世界情勢の変化」なるものを唯一の口実にして、レーニンがあたえたもつと重要かつ決定的な革命的原則をねじまげようとする、真正正銘の「修正主義」党および「修正主義」者の悪質・執拗なこころみである。われわれは、レーニンの教示を念頭において、つぎに、現実の「社会主義」社会について、それらがどのような社会であるか、それらがどの方向にむかって、どのようにすすみつつあるかということをとらえるべく、簡単な考察をこころみることにしよう。

## 十一

現在の「社会主義」諸国のうちで、きわだった、対立する二つの潮流を代表するものとして、われわれは、ソ連邦と中国との二つをとりあげて、必要な考察を加えることにしよう。これら二国のうち、まず最初に検討する必要がある



るのは、歴史的順序からいっても、当然、ソ連邦である。考察の中心問題は、これまでの検討によって明らかにならうに、それは、現在どういう社会であるのか、マルクス・レーニンによってただしく規定された社会主義であるのか、またはそうでないのか？ 社会主義でないとするれば、それは、どのように規定されるべきであるのか？ それは、どういう方向にむかって発展しつつあるのか？ 社会主義にむかって確実に前進しつつあるのか、それとも、資本主義にむかって後退しつつあるのか？ ということである。そして、右の問題と関連して、貨幣の問題がある。つまり、そこでの「貨幣」は、いったい、範疇的にみて、貨幣というべきか否か？ 貨幣でないとするれば、どのように規定されるべきか？ という問題である。

一九一七年十月のロシアにおけるプロレタリア革命の勝利とソヴェト権力の確立は、世界プロレタリア共産主義革命の時代の始まりを意味するものといふことができる。ソヴェト権力は、貧農層および半プロレタリア層の支持のもとに実現されたプロレタリアートの独裁であつて、それは、民主主義革命を徹底的に遂行すると同時に、はやくも国の社会主義的改造を目指して社会主義的方策を強力に推進したのである。——地主的土地所有の没収と国有化、資本家的企業にたいする労働者管理、すべての銀行と信用機関の国有化、すべての株式企業の国有化、鉄道・外国貿易・商船隊の国有化、最高国民経済会議の設立、等々。しかし、まもなく、反革命白衛軍の武力侵攻による国内戦の時期がはじまり、社会主義的改造は一時後退を強いられ、いわゆる戦時共産主義の方策をとることとなる。<sup>26)</sup> 帝国主義列強が強力に支援する反革命白衛軍との苛烈な武力闘争は三年間にもわたり、反革命軍は完全に潰滅するが、帝国主義戦争にひきつづく国内戦によって、生産力の減退は甚しく、たとえば国営工業生産高は戦前の二〇%以下に、穀物生産高は三〇%に落ち、食糧徴発等の戦時共産主義政策は転換を迫られ、一九二二年ネップ（新経済政策）への移行がな

される。<sup>(27)</sup> ネットは、食糧徵發を食糧税にきりかえ、税率をひきさげ、租税を納めたあとの剰余は農民の自由な処分にかまかせ、取引の自由を保障したが、それは、富農・資本主義を鼓舞するためではなく、労働者および農民の労働生産性を高め、市場関係を利用して農民・小商品生産者と社会主義的大工業との正しい結びつきを確保し、これによって富農・資本主義との闘争と農村の社会主義的改造とをおしすすめるためのものであった。しかし国民経済の復興は、けっして容易ではなく、種々の困難と障害<sup>(28)</sup>をのりこえて、一九二五年、ようやく国民経済の回復があらわれ、ついで、レーニンのおとをついだスターリンの指導のもとに、一九二五年末、ソ連邦の社会主義工業化の政策がうちだされ、二年後工業化は戦前の水準をうわまれるほどの成功をかちえた。しかし、農業部門のたちおくれは、富農の反抗によって克服されえず、ここに富農(と闇商人)にたいする強力的攻撃が必要となり、貧農に依拠し、中農との同盟をかためることによって富農にたいし断固たる闘争をおこなうという方針は、富農にたいする制限からさらにその一掃にまで発展するようになり、コルホーズ運動の広範な展開と第一次五カ年計画の成功的完遂によつて、ここに社会主義建設の基礎は、一九三三年、ようやくゆるぎないものとなることができた。

(26) この時期に書かれたのが、さきに引用したレーニンの貴重な労作、『偉大な創意』である。

(27) この決定的に重要な政策転換をめぐりに理論づけて論証したのが、レーニンの画期的な労作、『食糧税について—新政策の意義とその諸条件』(一九二二年四月)である。小商品生産者としての小農民層が広範に存在していないような資本主義国(および新興国)はほとんどなく、したがって、この労作の中に示された基本方針はきわめて重要な国際的意義を今日でもなお有しているといわなければならない。レーニンは、その中で、「現在の体制のなかに、資本主義と社会主義との両方の諸要素、小部分、小片がある」ことを指摘し、これら諸要素を的確に把握するところに「問題の核心」があると述べて、まず諸要素を列挙し、それらの相互関係を考察している。行論での参考までに、その諸要素をつぎにかかげておこう。

「(一)家父長制的な、すなわち、著しい程度に現物的な農民経済、

(二)小商品生産(穀物を売る農民の大多数はこれにはいる)、

(三)私経営的資本主義、

(四)国家資本主義、

(五)社会主義」(全集第四版、第三十二卷、三〇九—三一〇ページ)。

(28) これらの困難と障害のうちでもっとも重大なもののひとつは、トロツキーを頭とする一派およびこれと連合した諸分子によるポリシェヴィキ党の革命的方針の妨害と執拗な反革命的陰謀のくりかえしである。一九一七年以前のトロツキーの革命的・反レーニンの言動はすでに周知のところであるが、彼がそもそも「革命家」として出発した一八九〇年代当時から、終始一貫、マルクス主義とはまったく無縁の、真正正銘のえせマルクス主義者、骨の髄からの野心的・俗物的政治家、反マルクス主義的デマゴグにほかならなかったこと、一九一四年にいたるまでレーニンを叩きおとして革命党の親方に居坐ろうと策動したあわれむべき陰謀家にすぎなかったということは、まだあまりよく知られていないように思われる。ロシア革命の発端、即ち一九一四年まで、マルクス主義的・革命的理論を發展させ革命的戦略をうちだしてきたレーニンとの対比においてトロツキーの言動と理論の反マルクス主義的・反革命的本質を——ロシア革命の情勢展開との関連において——追究するために、わたくしは、本誌第二十四巻第四号より第二十八巻第二号まで十五回にわたって、『経済と政治との関連の問題——いわゆる「トロツキズム」の性格規定』というテーマで、論稿を載せてきた。そこでは、このトロツキーが、現代修正主義の「指導者」どもにとってその元祖の一人にほかならないということも、論証されている。ついて参照されたい。

第一次にひきつづき、一九三三年にはじまる第二次五カ年計画も一九三七年四月成功裡に期限前達成ががちとられ、ソ連における工業および農業のいっそうの躍進、農業の改造と集団化の達成、勤労人民大衆の福祉の向上もとげられ、こうしてソ連国民経済の改造は、一九二四年に制定されたソ連憲法の改正を必然的なものにし、はやくも一九三六年十一月、第八回ソヴェト大会において、新しい憲法草案が可決されるまでになった。この憲法は、スターリン憲法とも呼ばれ、きわめて重要な、劃期的意義をもつものであり、スターリン以後のソ連邦のあり方をとらえるうえ

でも不可欠のものであるので、つぎに、この大会でスターリンがおこなった『ソ連憲法草案について』と題する報告のなかから、当面重要とおもわれる個所を引用して、若干の考察を加えておくことにしよう。

スターリンは、その報告演説のうちの「一九二四年から一九三六年までの期間におけるソ連邦の生活における諸変化」と題する第二節のなかで、一九二四年がネップの第一期であるのにたいして、一九三六年はネップの最終の時期であり、国民経済のあらゆる分野で資本主義が完全に絶滅された時期であると述べ、工業、農業、国内の商品流通における変化をつぎのように説明している。

「わが工業が、この期間に巨大な力に発展したということをまず第一に挙げよう。現在わが工業を貧弱な、技術的に劣悪な装備をもった工業だと言うことはもはやできない。反対に、それはいまや、非常に発達した重工業およびさらにより多く発達した機械製作工業をもった、新しい、豊富な現代的技術に基礎をおいている。もつとも重要なことは、資本主義がわが工業の分野から完全に駆逐され、社会主義的生産形態がいまやわが工業の領域において全一的に支配する体制となっている、ということである。わが国の現在の社会主義的工業が、その生産高の大きさという点からみて、戦前の時期の工業を七倍以上も凌駕しているという事実は、けつして小さいことと考えてはならない。

農業の領域では、優勢なクラークと貧弱な技術をもった小規模な個人的農業経営の大洋のかわりに、われわれはいまや、コルホーズとソフオーズのすべてを包括する組織という形をとった、世界でもつとも強大な、機械化され、新しい技術で装備された生産を有している。周知のように、農業におけるクラークは一扫されてしまい、おくれた、中世的な技術をもった小規模な個人的農業経営の部面は、いまやとるにたりないほどの地位を占め、しかもそれらの農業における比重は、播種面積の規模からみて、二―三パーセントを超えないのである。強調する必要があるのは、

コルホーズが現在出力五七〇万馬力の三一万六千台のトラクターをもっており、ソフォーズの分とあわせれば、七五八万馬力、四〇万台以上のトラクターをもっている、ということである。

国内の商品流通についていえば、大商人と闇商人は、この領域から完全に一掃された。全商品流通は、いまや国家、協同組合およびコルホーズの手中にある。新しい、ソヴェト商業、闇商人なしの商業、資本家なしの商業が生まれ、発展した。

このようにして、国民経済のすべての部面における社会主義制度の完全な勝利が、いまや事実となっている。だが、これはどういうことを意味するか？

これは、人間による人間の搾取が廃絶され、一掃され、生産用具と生産手段にたいする社会主義的所有がわがソヴェト社会のゆるぎない基礎として確立された、ということを意味している」(『レーニン主義の諸問題』、第十一版、国立政治文献出版所、五四七―五四八ページ)。

ついでスターリンは、右にあげたソ連経済機構の領域での変化に対応して、国内の階級構成もまた根本的に変化したと述べ、地主階級、資本家階級(工業および農業における)、大商人、闇商人など、搾取階級はすべて絶滅されて、残ったのは労働者階級、農民階級およびインテリゲンツィアであるが、これら三つの階級もこれまでのものから根本的に変化したと、つぎのように主張する。

「労働者階級が生産用具と生産手段とを所有し、また資本家階級が絶滅してしまったからには、労働者階級を搾取する可能性はことごとく排除されてしまっている。そのあとでもまた、わが国の労働者階級をプロレタリアートと名づけることができるだろうか？ あきらかに、そう名づけてはならない。マルクスはつぎのように述べた。プロレタ

リアートが自己を解放するためには、資本家階級を粉砕し、資本家どもから生産用具と生産手段とを取りあげて、プロレタリアートを生みだす生産諸条件を廃絶しなければならない、と。ソ連邦の労働者階級はすでにこれらの彼らの解放の諸条件を実現したとすることができるか？ 無条件にそう言うことができるし、またそう言わなければならない。だが、このことはどういうことを意味しているか？ これは、ソ連邦のプロレタリアートが、まったく新しい階級に、資本主義経済制度を廃絶し、生産用具と生産手段とにたいする社会主義的所有を確立し、ソヴェト社会を共産主義にむかって導きつつある、ソ連邦の労働者階級に転化した、ということの意味している。

見られるように、ソ連邦の労働者階級は、搾取から解放された、まったく新しい労働者階級であり、これと同様のものは、人類の歴史がいまだかつて知ったことはない」(前出、五四九ページ)。

「……わがソヴェトの農民階級は、まったく新しい農民階級である。わが国には、農民を搾取できるような地主や、クラーク、商人、高利貸はもはやいない。だから、わが国の農民階級は搾取から解放された農民階級である。さらに、わがソヴェトの農民階級は、その圧倒的大部分がコルホーズ農民である。つまり、彼らは、彼らの仕事と彼らの資産とを、個人的労働とおくれた技術とにもとづいてではなく、集団的労働と現代的技術とにもとづいてもっているのである。最後に、わが農民階級の経済の基礎になっているのは、私的所有ではなく、集団的労働の基礎の上に成長した集団的所有である。

みられるように、ソヴェトの農民階級は、まったく新しい農民階級であり、これと同じものは、いまだかつて歴史によって知られていない」(前出、五四九―五五〇ページ)。

「……わがソヴェトのインテリゲンツィアは、あらゆる根によって労働者階級および農民階級に結びつけられてい

る、まったく新しいインテリゲンツィアである。第一に、インテリゲンツィアの構成が変化した。貴族およびブルジョア出身の者は、わがソヴェトのインテリゲンツィアのわずかなパーセントしか占めていない。ソヴェト・インテリゲンツィアの八〇〜九〇パーセントは、労働者階級、農民階級およびその他の勤労者層の出身者である。最後に、インテリゲンツィアの活動の性格そのものも変化した。以前には、彼らは、富裕者階級に奉仕しなければならなかった。というのは、彼らにはこれよりほかに仕方がなかったからである。いまでは、彼らは、人民に奉仕しなければならぬ。というのは、搾取階級はもはや存在しなくなったからである。そして、まさにそれゆえにこそ、彼らはいまでは、ソヴェト社会の平等の権利をもつ成員であり、その社会で彼らは、労働者および農民といっしょに、彼らと肩をならべて、新しい、階級のない社会主義社会の建設に従事しているのである。

みられるとおり、これはまったく新しい、勤労インテリゲンツィアであって、これと同じものは地球上のどこの国にも見いだされないのである」(前出、五五〇ページ)。

このように「過ぎ去った期間にソヴェト社会の階級構成の領域で生じた変化」を説明したのち、ここからスターリンは、つぎのような結論をひきだしている。

「これらの変化は、なにを物語っているか？

それは、第一に、労働者階級と農民階級とのあいだの境界標が、それと同じくこれらの階級とインテリゲンツィアとのあいだの境界標が、拭い去られていき、古い階級的な排除ということが消滅していくことを、物語っている。これは、これらの社会的グループのあいだの距離がますます縮まっていくことを意味する。

それは、第二に、これらの社会的グループのあいだの経済的矛盾が衰えて拭い去られていくことを物語っている。

それは、最後に、これらグループのあいだの政治的矛盾も同様に衰え、拭い去られていくことを、物語っている」(前出、五五〇―五五一ページ)。

さらに、「憲法草案の特質」と題された報告の第三節のはじめで、スターリンは、憲法と綱領との本質的差異を指摘して、

「綱領はまだ無いもの、将来においてさらに獲得され闘いとられるべきものについて述べているのにたいして、憲法は、これと反対に、すでにあるもの、現在すでに獲得され闘いとられているものについて述べなければならない。綱領は主として将来のことを、憲法は現在のことを取りあげるのである。」(前出、五五二ページ)

と述べ、その「例解」として、つぎのような説明をあたえている。

「わがソヴェト社会は、すでに基本的に社会主義を実現し、社会主義制度を創りだすことをなしとげた。すなわち、マルクス主義者によって共産主義の第一の、または最低の段階と別呼ばれているものを実現した。つまり、わが国においてはすでに基本的に共産主義の第一段階、社会主義が実現されたのである。共産主義のこの段階の根本原則は、周知のように、「各人からその能力に応じて、各人にはその労働に応じて」という定式である。わが憲法は、この事実を、社会主義が闘いとられたという事実を反映しなければならないか？ わが憲法は、この獲得に基礎をおかなければならないか？ 無条件にそうしなければならない。社会主義はソ連にとつてすでに獲得され闘いとられたものであるから、そうしなければならない」(前出、五五三ページ、傍点―山本)。

以上の引用によつても明らかのように、スターリンは、十月革命後わずか十九年しかたっていない一九三六年にはやくも、ソ連邦において共産主義の第一段階Ⅱ社会主義が実現されたと述べ、ここでは、資本主義がすべての部面か



ら完全に一掃され、資本家階級は絶滅され、国民経済のすべての部面において社会主義制度の完全な勝利がなしとげられ、労働者階級、農民階級およびインテリゲンツィアはいずれもこれまでの歴史にみられなかったまったく新しい社会主義社会の労働者階級、農民階級およびインテリゲンツィアに変わった、と主張している。このような主張は、はたして正しいもの、客観的事実を的確にとらえているものということができるであろうか？ 明らかに、否、である。このことは、スターリン自身の報告の中味を多少とも注意ぶかく読むことによっても、容易にうかがわれる。スターリンの主張が重大な問題をもっていると考えられる点を、以下簡単に記してみよう。

1 労働者階級と農民階級とが、それぞれ階級全体としては、その抑圧者・搾取者を打倒して終局的解放をかちとった、まったく新しい階級であるということではある。しかし、労働者階級の内容については、いいかえれば、その成員ひとりひとりについてみるならば、けっしてすべてが自覚のある、社会主義的意識をもち、規律にしたがりりっぱな革命的労働者であるとはいえない。第一、十月革命まで搾取階級であったブルジョアジーと地主階級およびこれに奉仕していた高級官僚、高級技術者、高級会社員、高級軍人、警察官など、その家族をふくめて一千万人以上にのぼるといわれる連中は、どこへ行ってしまったか？ その一部は国外に逃げ、他の一部は国内戦で死んだとしても、なお数百万は国内に残存し、しかも、ソヴェトの労働者、農民またはインテリゲンツィアとしてそれぞれ然るべき地位を占めていることは疑いない。これらの連中の意識がブルジョア的、反革命的であること、かれらが、レーニンの明示しているように、「十倍の精力と狂暴な熱情と百倍にも増加した憎しみ」を心の奥に秘めて、「奪いとられた『樂園』をとりもどすために、いままでは非常に楽しい生活をしてきたのに、いまや『平民の無頼漢』から零落と貧困とそして『卑しい労働』の運命を負わされた家族のために」、憎むべきソヴェト権力の打倒をめざして、ありとあらゆる

る妨害工作と反革命的陰謀術策を陰に陽におしすすめるべく狂奔しないではないことは、明白である。第二に、旧搾取階級分子以外の、小ブルジョア出身の労働者および生え抜きの労働者にしても、そのかなりの者は、小ブルジョアの意識を根強くもっており、個人主義的利己心を拭いきれず、旧社会での習慣と因習につよくとらわれているのであって、かれらは、社会主義建設の事業に背を向け、私的利益を追求し、そのために、旧搾取階級分子の反革命的策動に乗せられやすい一面さえもっているのである。十九年前までは、貧困と無権利にうちひしがれ、おどかされ、無知でばらばらであった労働者、農民の広範な人民大衆が、わずか二十年足らずで一人のこらず自覚ある社会主義的意識の持主に生まれかわるなどということが、ありうるだろうか？

労働者階級よりもさらに問題があるのは、農民階級とインテリゲンツィアである。富農は一掃されたが、その大部分はコルホーズ員に「生まれかわった」し、富裕な中農にしても、その個人主義的利己心をよりよく満足させるべくコルホーズに入った者も少くない。かれらは、生活水準も高く、より高い知識・技術をもっているために、コルホーズで幹部要員の地位を占めることは容易である。インテリゲンツィアは、もともとブルジョア的な科学、芸術、文化および技術の担い手であって、その大部分はその意識も生活も骨の髄からブルジョア的ないしは小ブルジョア的であって、献身的な、労働者・農民に奉仕する社会主義的インテリゲンツィアは、きわめて少数といわざるをえない。だから、こうしたそれぞれの階級の内容を正確にとらえないで、たんに所有形態および経営形態だけに注目して、私的所有が社会主義的所有および集団的所有に、私的・個別的労働組織が社会的・集団的労働組織に変わった——それも、一〇〇%実質が変わったのではない——からといって、それに結びついている人間もただちに社会主義的意識の持主が変わってしまうと言うのは、まったく非弁証法的な、形而上学的・主観主義的主張といわなければならない。

2 同様にして、社会主義が完全に実現されたという主張も、現実を無視したものである、といわなければならない。マルクス・レーニンのいう社会主義は、すべての生産手段の社会的所有を基本とする。だが、ここでは、社会的所有は工業部面においてのみで、農業部面では限られた共同的所有が、個人的経営より集团的経営の方がより多くの個人的利益が保証されるという、私的利益追求を温存する可能性をもつ所有形態が支配しているのである。

3 さらに、スターリンは、ソ連の工業部面では社会主義的所有が完全に実現したと述べているが、この主張は、三年後のソ連共産党第十八回党大会での彼自身の報告のなかで「訂正」されているのである。その報告演説の第二章「ソ連邦の国内情勢」の「一 工業と農業とのいっそうの昂揚」のなかには、「一九三四—三八年のあいだにおけるソ連邦工業の増大」を示す下記の表が示されている。

		1926—27年価格 (百万ルーブリ)	1933	1934	1935	1936	1937	1938
総 産 高			42,030	50,477	62,137	80,929	90,166	100,375
内	社会主義工業		42,002	50,443	62,114	80,898	90,138	100,349
	私 営 工 業 (百分比)		28 (0,07)	34 (0,07)	23 (0,04)	31 (0,04)	28 (0,03)	26 (0,03)

スターリンは、この社会主義工業と私営工業との比率を指して、

「この表によつて、社会主義制度が、ソ連邦における工業の唯一の制度であることがみられる。最後に、この表に

貨幣の範疇規定について (三)

よって、私営工業の終局的破滅が、今や盲人にさえも否定できない事実であることが見られる。」(前出、六一六ページ、傍点—山本)

と述べているが、しかし、たとえ百分比においてわずか〇・〇三%を占めるにすぎないとはいえ、二六〇〇万ルーブリの生産額をもつ私営工業がまだ残存しているかぎり、これをしも「私営工業の終局的破滅」として片づけることは、事実を曲げるものといわざるをえない。

4 農業部面においても、集团的所有が全一的に支配するものとはなっていない。同じ第十八回党大会での報告演説のなかで、「個人農経営の破滅」を強調し、その裏付けとして、一九三三年と一九三八年におけるコルホーズと個人農との穀物播種面積を数字で示し、コルホーズは七千五百万ヘクタールから九千三百万ヘクタールに増大したが、個人農は千五百七十万ヘクタールから六十万ヘクタールに、百分比で〇・六%に激減したと述べている(前出、六一九ページ)。だが、一九三八年においてさえ、個人農は農家総数の六・五%を占めている。つまり、一〇〇戸のうち六—七戸はコルホーズに加入していない独立経営者となっている。さらにまた、コルホーズ農民のほとんどすべてが私経営地—自留地を多かれ少なかれ保有してコルホーズの共同労働よりも彼個人の自留地での生産活動により深い関心をよせているという現実を考えあわせるならば、その集团的所有形態なるものは、社会主義的所形態だといえるものではなく、むしろ個人的利益を基本とする集团的利益共同体に近いものといわなければならない。自留地は、まぎれもなく個人的・私的経営の残存物であって、たとえ、右の六・五%を無視するとしても、「個人農経営の破滅」という主張は、表面的な形式にとらわれた主観的判断を示すものといわざるをえない。

5 「搾取階級の根絶」という断定も、さきにもみたように、事実関係をまったく無視した、主観的形式論である。

第一に、それは、さきにくりかえし引用してかかげた、過渡期にかんするレーニンの教示をまったく考慮にいれていないものであつて、理論的にみて過渡期の法則の無理解を示すものである。第二に、それはまた、現実にソ連邦国内でひきつづきおこなわれていた階級闘争の存在を、いわば無視するものであつて、スターリン自身の革命的行動そのものによつて論駁されているといつてよい。というのは、ソ連邦国内では、一九三六年以降も搾取階級の残存分子による反革命的陰謀と策動がくりかえされ、これにたいする闘争と反革命分子の肅清がひきつづきおこなわれたからである。搾取階級の残存および新たな搾取階級の発生の可能性は、過渡期における基本的な法則の現われにすぎないのであるが、残念ながら、スターリンはこれをただしくとらえることができなかった。だが、スターリンが後統の現代修正主義の巨頭たちと本質的に異なる点は、彼が、理論上では搾取階級が根絶し、階級闘争はなくなり、国内的には国家権力の存在の理由はなくなつたとしながら、しかも、実践においては、反革命分子にたいする闘争を強化し、搾取階級および新生搾取階級にたいする強圧をつよめ、そのために国家権力・プロレタリアートの独裁の維持・強化をはかつたといふところにある。このようにして、「搾取階級の根絶」と「社会主義制度の完全な実現」を一方で公式的にかかげながら、したがつて、国家権力の存在の根拠を否定する主張をかかげながら、他方でソヴェト国家権力・プロレタリアートの独裁の維持・強化が現実におこなわれているといふ、いわば「理論」と事実との「矛盾」を説明するために、スターリンは、国家権力の存在の根拠を国内の階級対立から「帝国主義国による包囲」といふ「外部的要因」に求めることとなつたものである。この点については、つぎの節でふれることにしよう。

いずれにせよ、一九三六年においてソ連邦国内で「搾取階級の根絶」が完了し、共産主義の第一段階としての社会主義が完全に実現されるにいたつたといふ主張は、マルクス・レーニンの社会主義および過渡期にかんする基本的理

論に背反するものであり、また、ソ連邦の現実の生産関係および階級闘争の実態を正確にとらえたものということができる。スターリンは、レーニンの教示した社会主義建設を正しくうけつぎ発展させて、資本主義分子の一掃、社会主義的工業の確立と発展、農業の集団化をおしすすめ、二次にわたる五カ年計画を成功的に完遂して、一九三六年にさきにしたような輝かしい社会主義建設の実績を挙げるにいたったのであるが、マルクス・レーニンのプロレタリアートの独裁および過渡期にかんする基本的理論を十分正しく把握してこれを適用する面で欠けるところがあり、彼の致命的弱点の一つといわれる形而上学的・主観的思考に災いされて、理論ならびに実践のうえでマルクス・レーニン主義の基本原則から逸脱するという結果を生みだした。いま当面の問題にかんするかぎりでとくに重要な意味をもっている理論的難点をあげるならば、決定的に重大なものとしては、さきあげた「階級対立の完全な止揚と社会主義の完全な実現」およびこれと結びついた「国家権力の存続の理由づけ」がその一つであり、いまひとつは、一九五二年に明白にうちだされた「社会主義のもとでの経済法則と商品生産および価値法則の理論」である。これら二つは、理論上からみて重大な誤謬をおかすものであるとはいえず、スターリンは、その社会主義建設の実践的活動においては、むしろこれらの誤った主張と反する正しい方針を遂行していたのであり、これらの誤った理論は正しい革命的実践によって事実上訂正もしくは否定されていたといえることができる。ところが、スターリンなきあと、「スターリンの全面的抹殺」を呼号する現代修正主義の親方たちは、その広言にもかかわらず、スターリンがうちだした右の二つの誤った理論をそっくりそのまま無断盗用して、これら二つをほとんど唯一の「理論的根拠」として、彼らの「共産主義社会建設」という、反マルクス・レーニン主義的主張をうちだしているのである。口先きではスターリンを徹底的にやっつけながら、裏ではこっそりとスターリンの主張をそのままかすめとってこれを唯一の頼りとしてその醜

い修正主義的主張を合理化しようとしているその二面的手口のほどはまたあとでとくと見定めることにし、そのまゝに右の二つの理論的問題について必要な検討を加えておくことにしよう。

## 十二

一九三九年三月開かれたソ連邦共産党第十八回大会における報告演説のなかで、スターリンは、その第二章「ソ連邦の国内情勢」の「三 ソヴェト制度のいっそうの強固化」のはじめで、

「現在の時期のソヴェト社会の特殊性は、どんな資本主義社会ともちがって、この社会のうちにはもはや対立的な、敵対的な階級がなく、搾取階級は清算され、そしてソヴェト社会を構成している労働者、農民およびインテリゲンツィアは、友誼的協力の原則にもとづいて生活し、働いている、ということである。」(前出、六二九ページ)

と述べて、階級対立の消滅を強調し、さらに、報告の最後におかれた「理論についての若干の問題」と題された節のなかで「社会主義国家の問題」をとりあげ、「ソ連では、搾取階級はすでに根絶され、国内に敵対的階級はなくなり、社会主義の第一段階が完成され、共産主義にむかって進みつつある。だから、社会主義国家の死滅を助成すべきではないか?」という質問がしばしば出されていると述べ、これにたいする答えとして、ソヴェト国家権力の維持・存続の根拠を、つぎのように説明している(……は中略部分)。

「たとえば、エンゲルスによって与えられた、社会主義国家の発展の理論の古典的定式化をとってみよう。

「抑圧しておかなければならない社会階級がもはや存在しなくなったそのときから、階級支配や、これまでの生産の無政府状態にもとづく個人間の生存闘争とともに、それらのものから生じる衝突や暴行がまたとりのぞかれ

たそのときから、特殊な抑圧力である国家を必要とするような、抑圧すべきものはやなにもなくなる。国家が真に社会の代表者として現われる最初の行為——社会の名において生産手段を掌握すること——は、同時に、国家が国家としておこなう最後の自主的な行為である。社会関係への国家権力の干渉は、一分野から一分野へとつきつぎに余計なものになり、やがてひとりりで眠りこんでしまう。人にたいする統治に代わって、物の管理と生産過程の指揮とが現われる。国家は「廃止される」のではない。それは死滅するのである。」(『反デューリング論』)。

エンゲルスのこの命題は正しいか？

そうだ、正しい。だが、つぎの二つの条件のうちどちらか一つがある場合に正しい。それは、(1)国際的諸要因からあらかじめ引きはなして、研究の便宜のために国際的環境から国と国家を孤立させて、たんに国の内部的発展の見地から、社会主義国家の研究をおこなうならば、(2)社会主義がすでにすべての国でかまたは大多数の国で勝利し、資本主義的包囲の代わりに社会主義的包囲が存在し、もはや外部からの攻撃の脅威もなく、軍隊と国家の強化の必要ももはやないと仮定するならば、である。

ところで、もしも社会主義がたんに一つの孤立した国でだけ勝利し、そのために国際的諸条件から自分をひきはなすことがまったく不可能であるならば、そのような場合はどうであろうか？ エンゲルスの定式化は、これには答えをあたえていない。エンゲルスは、本来、このような問題を自分に提起してはいない。だから、この問題にたいする答えは、彼のものにはないのである。エンゲルスは、社会主義がすでにすべての国でか、または大多数の国で多かれ少なかれ同時に勝利した、という仮定から出発している。したがって、エンゲルスが研究しているのは、ここでは、あ

る個々の国のある具体的な社会主義国ではなくして、大多数の国における社会主義の勝利という事実の仮定のもとで



の、社会主義国家一般の発展である。……

ところで、このことから当然出てくるのは、社会主義国家一般の運命にかんするエンゲルスの一般的定式化を、自己の周囲に資本主義的包围をもち、外部からの軍事的攻撃の脅威にさらされており、そのために国際的環境から自分を引きはなすことができず、よく訓練された軍隊とよく組織された懲罰機関と強力な諜報機関とを駆使しなければならず、したがって、外部からの攻撃から社会主義の獲得したものを守る可能性をもつために、十分に強力な自己の国家をもつ必要がある、そういう一つの、単独の国における社会主義の勝利という、特別の、具体的なケースにまで拡大してはならない、ということである。

資本主義を打倒するためには、たんにブルジョアジーの権力を剝奪し、資本家を収奪するばかりでなく、ブルジョアリーの国家機関を、その旧軍隊、その官僚主義的官僚層、その警察を完全に粉砕し、そしてその代わりに、新しいプロレタリア的国家制度、新しい社会主義国家をうちたてなければならぬ。周知のように、ボリシェヴィキはまさにそのように行動したのである。だが、このことから、新しいプロレタリア国家のもとでは、プロレタリア国家の要求に適応するように変えられた旧国家の若干の機能が保存されえない、ということはお出ででない。そのことから、わが社会主義国家の諸形態が不変のままではないければならぬとか、わが国家のいっさいの基本的な機能が将来においても完全に保存されなければならぬとかいうことは、なおさら出てこない。事実、わが国家の形態は、わが国の発展と外部的環境の変化にしがたがって変わりつつあるし、またこれからも変わるであろう。

レーニンのつぎの言葉はまったく正しいものである。

貨幣の範疇規定について (三)

「ブルジョア国家の形態は多種多様であるが、その本質は一つである。これらの国家はみな、形態はどうであろうとも、結局のところ、かならずブルジョアジーの独裁なのである。資本主義から共産主義への移行は、もちろん、きわめて多数の多種多様な政治形態をもたらさざるをえないが、しかしそのさい、本質は不可避免的にただひとつ、プロレタリアートの独裁であろう」(『国家と革命』<sup>(29)</sup>)。

十月革命いらい、わが社会主義国家は、その発展において、二つの主要な段階を経過した。

第一の段階——これは、十月革命から搾取階級の根絶までの時期である。この時期の基本的任務は、打倒された諸階級の反抗を弾圧し、干渉者の攻撃からの国の防衛を組織し、工業と農業を復興させ、資本主義的要素の根絶のための諸条件を準備することであった。それに応じて、わが国家は、この時期に、二つの基本的機能を実行した。第一の機能は、国内の打倒された階級の弾圧である。これによって、わが国家は、外見からは、その機能が従わない者を弾圧することにあつた以前の国家に似ているが、しかし、そこには、わが国家が勤労する大多数の者の利益のために搾取する少数の者を抑圧しているのにたいし、以前の国家は搾取する少数の者の利益のために搾取されたという、根本的な差異がある。第二の機能は、外部からの攻撃から国を防衛することである。この点でもまた、それは外見上、自国を武力によって防衛した以前の国家と似ているが、しかし、そこには、わが国が勤労する大多数の者の獲得したものを外部からの攻撃から防禦しているのにたいして、以前の国家は、その場合に、搾取する少数者の富と特権とを防禦したという、根本的な差異があるのである。さらに、ここに第三の機能としてあつたのは、わが国の諸機関の経済的・組織的および文化的・教育的活動であつて、それは、新しい社会主義的経済の芽ばえを發展させ、社会主義的精神で人々を教育することを目的としていた。だが、この新しい機能は、この期間内に見るべき

発展をとげなかつた。<sup>(30)</sup>

第二段階——これは都市および農村の資本主義的分子の根絶から、社会主義的経済制度の完全な勝利と新憲法採用までの時期である。この時期の基本的任務は、全国にわたって社会主義経済を組織すること、資本主義的要素の最後の残りものを一掃すること、文化革命を組織すること、国の防衛のために完全に現代的な軍隊を組織することであつた。これに應じて、わが社会主義国家の機能も变化した。国の内部での軍事的抑圧の機能は、消滅した。なぜならば、搾取は廢絶され、搾取者はもはや存在せず、抑圧すべき者はいないからである。抑圧の機能の代わりに、国家のもとには、人民の財産の盗人と掠取者から社会主義的所有を防禦するという機能があらわれた、外部からの攻撃から国を軍事的に防衛するという機能は完全に保存され、したがって赤軍と海軍、そしてまた、外国の諜報機関からわが国にこっそり送りこまれるスパイ、暗殺者、妨害工作者を捕えつくし、罰するために必要な、懲罰機関と諜報機関もまったく同様に保存された。国家諸機関の経済的・組織者のおよび文化的・教育的活動の機能も保存され、そして完全に発展することになつた。現在、国の内部でのわが国家の基本的任務は、平和的な経済的・組織的および文化的・教育的活動である。わが軍隊、懲罰機関および諜報機関についていえば、それらは、すでにその切っ先を国の内部にはなく、その外部に、外敵に向けかえてゐる。

みられるように、われわれはいまや、いまだ史上に見られなかつた、その形態および機能において第一段階の社会主義国家とはいちじろしくちがつた、完全に新しい社会主義国家をもつてゐる。

しかし、発展はこの点にとどまつてゐることはできない。われわれは、さらにさきへ、共産主義にむかつて、前進してゐる。わが国には、共産主義の時期にも、国家が保存されるであろうか？

然り、資本主義的包圍が一扫されてしまわないかぎり、外部からの軍事的攻撃の危険が廃絶されないならば、国家は保存される。そのさい、わが国家の形態が、国内および国外の情勢の変化に應じて、ふたたび変化するであろうことは、いうまでもない。

否、もし資本主義的包圍が一扫されてしまうならば、それが社会主義的包圍によってとって代わられるならば、それは保存されなくて死滅するであろう。

社会主義国家にかんする問題については、事情はこのとおりである」(前出、六四二—六四六ページ、『傍点およびゴシツク体—山本』)。

(29) レーニンとは完全な共産主義社会が実現されるまで、つまり、「国家が眠りこむ」までのあいだ、いいかえれば、過渡期および共産主義の第一段階。社会主義の時期の全体にわたって、国家権力の存在は不可欠であり、プロレタリアートの独裁は必要であることを、ここで明確に述べているのであるが、スターリンは、この肝腎の点を見落しているのである。かれは、右のレーニンの教示に反して、「搾取階級の根絶」と「社会主義制度の完全な勝利」を根拠にして国家権力の本質が、したがってまたプロレタリアートの独裁の本質が、はやくも変化したとの主張をかかげている。かれが、レーニンの言葉について、「まったく正しい」といっているのは、「国家の形態は種々様々であって変化するものだ」ということをレーニンが裏付けてくれているものと早合点してのことである。

(30) ここでスターリンが「社会主義国家」の「第三の機能」として、「経済的・組織的および文化的・教育的活動」をあげ、それが「新しい社会主義的経済の芽ばえを發展させ、社会主義の精神で人々を教育する」ために不可欠のものであると指摘しているのは、きわめて正しい。それは、さきにわれわれが検討したレーニンの労作、『偉大な創意』のなかに明示されている社会主義建設の基本的要件を——きわめて不十分とはいへ——とらえたものと見ることもできよう。だが、レーニンが社会主義建設の不可欠の要件として力説強調した意味は十二分に汲みとられず、そのために、思想および意識の面での社会主義的変革のための努力が足りず、残念ながら、スターリン自身の認めているように、「この期間内に見るべき發展をとげなかった」

という結果におわつた。このような思想および意識の社会主義的変革の不徹底は、ブルジョア思想と小ブルジョアの意識の温存・鞏固化につながるものであり、後年ソ連邦における修正主義分子および新興ブルジョア層の簇生をきわめて容易ならしめるひとつの素地をつくるものとなつたといつてよい。

みられるように、スターリンは、マルクスのいわゆる「共産主義の低い段階」、すなわち社会主義体制が、十月革命からわずか十九年しかたつていない一九三六年において、ソ連邦ですでに完全に実現され、そこでは搾取階級は根絶され、階級対立はことごとく清算されてしまったという主張をここにはつきりとうちだしている。このような社会主義および過渡期にかんする理解が、マルクス・レーニンによって示された基本的理論からはずれていることは、スターリン自身の国内における反革命的なブルジョア分子および小ブルジョア分子と、さらには党内におけるさまざまの日和見主義的分派によつて代表される諸潮流とにたいする断乎たる闘争の継続の必要という、歴史的事実によつても裏書きされているといふことができる。社会主義および過渡期にかんするこうした考え方は、第一次および第二次五カ年計画の繰り上げ完遂という成功に眩惑されて一九三六年ににわかに生まれたものではなくして、ずっと以前からスターリンが抱いていたものであつて、このことは、一九二六年一月二十五日付で発表されたスターリンの有名な労作、『レ、ニ、ン主義の諸問題によせて』のなかの所論によつても明らかにかうことができる。

右の労作の「四 プロレタリア革命とプロレタリアートの独裁」のなかで、スターリンは、プロレタリアートの独裁の特徴についてたちいった説明をあたえたのち、「ここから、つぎのような、プロレタリアートの独裁の三つの基本的な側面が生まれてくる」として、つぎのように述べている（……は中略部分）。

「(一)搾取者の抑圧のため、国家の防衛のため、他国のプロレタリアートとの連係の強化のため、すべての国における

革命の發展と勝利のために、プロレタリアートの権力(Branch)を利用すること。

(二) 勤労被搾取大衆をブルジョアジーから終局的に引きはなすために、プロレタリアートとこれらの大衆との同盟を強化するために、これらの大衆を社会主義建設の事業のうちに引き入れるために、プロレタリアートの側からこれらの大衆にたいして国家的指導をおこなうために、プロレタリアートの権力を利用すること。

(三) 社会主義を組織するため、階級を廢絶するため、階級のない社会へ、社会主義社会への移行のために、プロレタリアートの権力を利用すること。

プロレタリアートの独裁は、これら三つの側面のすべてを合わせたものである。……それゆえ、プロレタリアートの独裁の概念を歪曲する危険をおかすことなしに、これら三つの側面のうちのどの一つをも除外することはできない。これら三つの側面がすべて一つに合わさつてのみ、プロレタリアートの独裁の完全な、完成された概念がえられるのである。

プロレタリアートの独裁は、そのいろいろの時期、そのいろいろの特殊の形態、いろいろちがった活動方法をもっている。国内戦の時期には、独裁の強力的側面がとくに目立つのである。だが、このことから、国内戦の時期にはどんな建設的活動もおこなわれない、ということはお出でこない。建設的活動なしに国内戦を遂行することは不可能である。社会主義建設の時期には、反対に、独裁の平和的・組織的・文化的活動、革命的合法性、等々がとくに目立っている。だが、このことからまた、建設の時期には独裁の強力的側面が消滅したとか、または消滅することができるとかいうことは、けつして出でこない。抑圧の諸機関、軍隊とその他の諸組織は、現在、建設の時期にも、国内戦の時期と同様に、不可欠のものである。これらの機関が存在しなければ、独裁の多少とも保障された建設的活動は不可能で

ある。革命がいまのところ一国だけで勝利したということをおぼえてはならない。資本主義の包圍の存在するかぎり、干渉の危険とその危険から生じてくるいっさいの諸結果もまたありうるであろうことを、忘れてはならない」(スターリン全集、第八卷、三〇—三二ページ、傍点—山本)。

さらに、右につづく「五 プロレタリアートの独裁の体制内での党と労働者階級」の冒頭においても、プロレタリアートの独裁が「社会主義の建設にいたるまでの過渡期」にとって必要だということが、つぎのように述べられている。

「わたくしは、前章で、その歴史的必然性の見地から、その階級的内容の見地から、その国家的本質の見地から、そして最後に、資本主義から社会主義への過渡期と名づけられる歴史上の一時期全体にわたって遂行されるその破壊的および創造的任務の見地から、プロレタリアートの独裁について述べた」(前出、三一—三二ページ、傍点—山本)。

みられるように、スターリンは、すでに一九二六年当時から、過渡期および共産主義の第一段階としての社会主義について、マルクス・レーニンのうちたてた基本的理論の内容を十分正しく理解せず、きわめて一面的・主観的な考えをもっており、工業における社会主義的所有制と富農を駆逐した農業における集団的所有制との確立とをもって簡単に社会主義の完全な実現と解し、そこにいたるまでの期間——わずか十九年間——を過渡期とし、プロレタリアートの独裁はこの過渡期にとって必要不可欠であるが、「搾取階級の根絶」と「階級対立の一扫」による社会主義制度の確立によって、プロレタリアートの独裁とプロレタリア国家権力は、国内的関係においてはすでにその存在理由を失っているものである、との考えをもっていたのである。ただし、過渡期および社会主義についてのこのような一面的な、誤った理論をいだいたにもかかわらず、プロレタリアートの独裁が当面する現実の要請におされ

て、スターリンは、さきにもふれたように、一九三六年以後においてもプロレタリア国家権力をいっそう強化し、搾取階級の残存分子および党内外のブルジョア的・小ブルジョア的分子の執拗な反革命的陰謀と企図とを徹底的に弾圧することを最後までやめなかつたのであつて、彼の実践は、かれ自身の理論に反して、プロレタリアートの独裁のいっそうの強化という、正しい路線を進まざるをえなかつたのである。これにひきかえ、スターリンを攻撃し、これに悪罵を加えることで自己の権威をとりつくろおうと狂奔する現代修正主義の親方たちは、当のスターリンのうちだした「社会主義の完全な実現」と「階級対立の一扫」という、誤つた理論をそっくりそのままこっそりと頂戴してこれを前面におしだし、この理論にもとづいて、これにびつたり対応する形で彼らの実践を、つまり、「全人民的国家」と「共産主義社会建設」という、まやかしの反マルクス・レーニン主義的空文句による資本主義復活の修正主義路線と社会帝国主義の強化を隠蔽し、おしすすめているのである。ところで、こうした剽窃と改ざんのやり手である現代修正主義の親方どもが、その反革命的実践のための公式的「論拠」として、ひそかにスターリンの「理論的武器庫」から盗みだしてまんまと悪用している主なものとしては、右のほかになお、「共産主義への移行」論と「社会主義における経済法則論」との二つをあげることができる。そこで、スターリン以後のソ連「社会主義」のあり方をみるまえに、スターリンのこれらの「理論」について簡単な考察を加えておく必要が生ずるのである。(未完)